

平成 21 年 6 月 29 日現在

研究種目：基盤研究 C  
 研究期間：2005～2008  
 課題番号：17530399  
 研究課題名（和文） 地方小都市・農漁村の震災時における生徒・学生たちの救援奉仕活動の実証的研究  
 研究課題名（英文） A study on the rescue activities of pupils and students at the local Small cities and countries in the big earthquake.  
 研究代表者  
 深井 純一(FUKAI JUN ICHI)  
 立命館大学・産業社会学部・名誉教授  
 研究者番号：40066692

## 研究成果の概要：

大正 25 年に北但馬で発生した大規模な地震の際に、被災地の中心にあった旧制豊岡中学校の生徒が救援活動の第一線に立ち、優れた功績を挙げた経過を手書き作文に残していた。それらの膨大な作文を読みやすい現代語に改めるとともに、分厚い作文集と資料集増補版に収録して刊行した。

この研究成果が地方小都市や農山漁村で大災害が勃発した際に、地元に残る中学性・高校生たちの救援活動の旺盛な展開に役立つ教訓を残しえたならば、これほどうれしいことはない。本研究報告は活動中に生徒たちの人身事故を起こさずに、安全に震災救援に邁進した未成年の若者たちへの『青春賛歌』に他ならない。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005 年度	1,900,000	0	1,900,000
2006 年度	800,000	0	800,000
2007 年度	200,000	60,000	260,000
2008 年度	400,000	120,000	520,000
総計	3,300,000	180,000	3,480,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：地方小都市・農漁村、旧制豊岡中学校、鳥取高等農業学校、天理外国語学校、朝鮮人労働者、生徒・学生たちによる救急・救命・消火・家財搬出活動、

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者(以下私)は作文集を発掘する平成 8 年の 1 年前に、学生諸君とともに淡路島漁村で阪神・淡路大震災の被害・救援・復興の過程を聞き取りする調査を実施していた。

(2) しかし地方小都市や農漁村の震災事例を

収集して、調査の仮説と分析視角を磨く必要性を痛感し、最初に北但馬震災の事例研究に着手した。そこで偶然に、旧制豊岡中学校の生徒 604 名が救援活動の第一線に立ち、優れた功績を挙げた経過を各自 2 編ずつ、合計約 1,200 篇に達する手書きの作文に残した作文集を発掘した。

(3)この作文を執筆したご存命の方々の多岐に渡るご協力が得られたことは、私の利用する第一次資料を豊富にし、分析掘り下げを可能にした。

## 2. 研究の目的

(1) この作文集の執筆者たちとの一連の交流を通じて、私は豊岡中学校に象徴される地方小都市・農漁村において、震災などの大災害が勃発して交通が途絶して、外部からプロの救援部隊の到着が遅れ、しかも地域内に強力な救援部隊が確保しえない時に、地元の中学生・高校生や近隣の中高等教育機関の学生など、若者たちの救援活動が果たしうる役割に注目するようになった。

(2)これまで刊行されてきた地震・津波などの災害被災者の回顧録は、そのほとんどが高齢者や地元小学生たちの筆になるものが大多数を占め、私の発掘したような若者たちの執筆したものは、1923年の関東大震災の際の帝大生たちの記録、および1948年の福井地震の際の学生たちの記録以外には皆無であろう。

(3)そのような活動を通じて若者たちは自らが救援活動の第一線の担い手を務めうるのみならず、さまざまな救援活動の形態・方法を創出する力量を備えているし、被災地の惨状や救援活動の有り様について、実に曇らぬ目で真実を見抜いている。

その意味で若者たちを救援活動企画者・観察者としても位置づける必要があることを私は発見した。今後も若者たちの救援活動への参加を追求していきたいと考えている。

## 3. 研究の方法

(1) まず豊岡市立図書館のご協力を得て、同

館の郷土資料を逐一精査し、『豊岡高校創立八十年史』の口絵写真から作文集の存在を知り、同校のご協力を得て、ご存命と思われる執筆者たちに各自の作文のコピーを送って、ご感想と補足の返信をお願いした。44名の方々がご丁寧なお返事を下さった。

(2) 豊岡・神戸・東京で執筆者たちの座談会を開催した。高齢者が多いため必ずしも参加者は多くなかったが、合計10余名の方々から貴重なご意見を聞き出すことが出来た。

(3) 但馬・丹後在住者を訪ねて聞き取り調査を実施した。応じて下さったのは11名であった。

(4) これらの作業と平行して必ずしも達筆とは言えない字で手書きされた作文集の解読と『新聞用語辞典』を基準に現代語化する作業に着手した。この作業は予想をはるかに超える時間と手間を要した。

ご存命の方々が他人に見せて恥ずかしくない文章をと強く望まれたのと、現代の高校生たちに読みやすい作文集にしたいという私の願いから、推敲作業を合計8回も繰り返して完全を期す結果となった。

原文に手を加えることの是非に関しては、歴史家などから強い異論もあったが、私は方針を変えなかった。執筆者たちの少なからぬ人々がご存命で有る場合に、公刊するに当たってご当人たちの強い望まれる校正を施すことは、当然許されるだろうからである。

(5) さらに一連の関西近傍の震災事例に着していた私は、鳥取震災の資料を収集するべく鳥取大学図書館を訪ね、そこで北但馬震災の際に城崎・豊岡の被災地へ自発的に救援に駆けつけた同校の前身豊岡高等農業学校の有

志学生たちの回顧録を発見することが出来た。その筆者の中にはご存命で私に回顧録を補足して下さる方もおられた。

(6) 鳥取高農と並んで学生たちの救援活動が展開されたのは、天理外国語学校であった。そのことを知りえたのは金子昭『駆けつける信仰者たち 天理教災害救援の百年』によるが、天理大学図書館を訪ねて関連文献を閲覧することが出来た。残念ながら天理外語の学生たちの回顧録は存在していなかった。

(7) 前述したが、関東大震災当時の帝大生たちの活動、福井地震の際の北陸地方その他の学生たちの救援活動に関連する資料を収集・閲覧した。

(8) 日本の地方都市・農山漁村の震災事例に可能な限り目を配るために、福井・徳島・和歌山・三重・愛知・神奈川・千葉・埼玉・宮城・岩手・秋田・青森・北海道の各道府県の大学・公立図書館を訪ね、資料の収集に尽力した。これらの資料を今回の研究報告では活用することが極めて不十分にしか出来ず、今後の機会を待つことにしたい。

#### 4. 研究成果

(1) 前述の生徒たち 604 名の作文集を誰にでも読める内容と文体で刊行することが出来た。これはその生徒たちの願いでもあった。作文執筆者との交流記録、鳥取高農学生の回顧録・返信や天理外語生たちの活動資料を『資料集増補版』として刊行することが出来た。

(2) 膨大な作文に収められた各生徒たちの救援活動の様相と被災地の諸相の目撃・聞き取りの結果は、〔倒壊と下敷き人救援・救命活動〕〔火災と消火活動〕〔火災延焼と家財の

搬出〕を始めとする合計 52 項目に分類して、紙数の制約上一部は圧縮を余儀なくされたものの、可能な限り作文の原文の文意を尊重して、活動と観察に関する重要な史実を伝え、読者に忘れえぬ印象的な表現で記録を残している作文の引用部分をまとめた。この作業によって約 1,200 篇の作文の精髓部分を抜粋することが可能になり、読者の便宜を図ることができた。

(3) また作文と重複しない、あるいは作文では簡単にのみ触れられているに過ぎない内容が、震災の半年後発行の同窓誌に寄稿された生徒融資の証言、あるいは執筆者からの返信、座談会記録、聞き取り調査結果に収められている場合には、作文からの抜粋引用にそれらを包摂して、内容を膨らませることに留意した。

(4) 私が注目したのは、未成年の生徒たちの手で初震災 1 週間余りの時期に書かれた作文と、近年 80 歳代に至って書かれ、あるいは語られた返信や座談会記録、聞き取り調査報告などの内容を比較すると、各々に長所と短所があるが、被災と活動の直後に綴られた作文内容の方がはるかに迫真性に富んでいる場合が少なくないことである。私がこの最終報告書において自ら書き換えることをできるだけ抑制し、作文の原文表現を可能な限り尊重した所以はそこにある。

(5) その他、地方小都市・農山漁村の震災事例の記録類を収集した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

深井純一、「1925 年北但馬震災における生徒・学生たちの救援活動の研究」、神戸大学

社会学研究会『社会学雑誌』、査読無、23号、  
2006年、17～45頁

深井純一、〔プロジェクト報告〕「1925年北  
但馬震災における生徒・学生たちの救援活動  
の研究」、同志社大学ヒューマン・セキュリ  
ティ研究センター年報、査読無、第5号、2008  
年、224～228頁

深井純一、〔研究ノート〕「田井久左衛門  
著・田井晴代訳『震潮記』に学ぶ」、立命館  
産業社会論集、査読無、第41巻第1号、2008  
年、187～196頁

〔図書〕(計4件)

深井純一、同時代社、『救命・消火の最前  
線を担った少年たち - 1925年北但馬震災に  
関する旧制豊岡中学校 604名の作文集 - 』、  
2006年、259頁

深井純一、同時代社、『資料集・増補版 か  
つての若者たちは追想する 1925年北但馬  
震災における救援活動に奔走して 』、2007  
年、95頁

岩崎信彦、田中泰雄、深井純一他、昭和堂、  
『災害と共に学ぶ文化と教育』(「阿波漁村の  
津波防災の努力と体験記出版」)、2008年、145  
～162頁

深井純一、同時代社、『作文抜粋 救援第  
一線に立った若者たち 1925年北但馬震災  
での生徒・学生たちの活動 』、2009年、115  
頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

深井 純一 (FUKAI JUN ICHI)  
立命館大学・産業社会学部・名誉教授  
研究者番号：40066692

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者